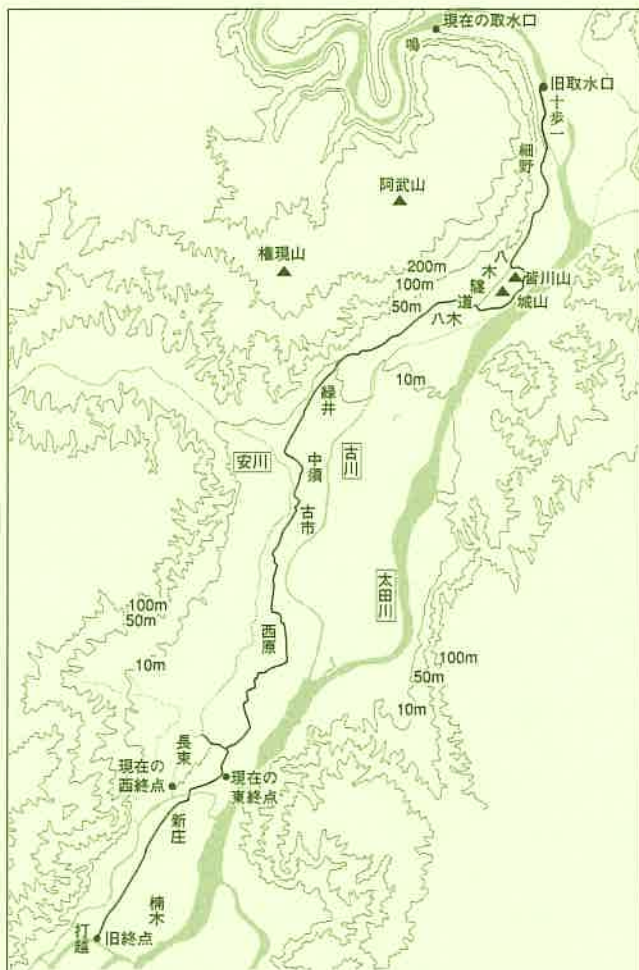


## 関係年表

年 代	内 容
寛文12 か?	1672 八木市から用水路を引くが、のちに太田川の洪水で埋もれてしまう。
宝永7	1710 中須村永下から用水路を引くが失敗。
正徳5	1715 西原村内の所々へ井戸を掘るが失敗。
享保3	1718 西原村海老松に水車を設けるが失敗。
享保16	1731 中須村永下から用水路を引くが失敗。
享保17	1732 八木村晒場から用水路を引くが失敗。
宝暦13	1763 八木村晒場から用水路を引く計画が出されるが、取りやめになる。
明和元	1764 西原村実近から水を引くが、古市村の反対により中止される。
明和4	1767 卯之助、八木用水開削工事の許可を願い出る。
明和5	1768 4月4日、八木用水の工事が始まる。 4月29日、八木用水の通水式が行われる。
明和6	1769 卯之助、八木用水開削の功績により、広島藩から二人扶持を給される。
文化14	1817 卯之助の子の巳之助により、「定用水碑」が建てられる。
大正8	1919 太田川の洪水で十歩一の取水口がこわれる。このうち取水口は鳴に移される。
昭和24 ころ	1949 三篠地区が水利組合からぬけたため、長束が八木用水の終点になる。
昭和26	1951 八木用水路の三面コンクリート工事が始まる。
昭和27	1952 八木隧道（導水トンネル）が完成する。
昭和30	1955 安川の流路つけかえにより、安川の下をサイフォンでくぐるようになる。
昭和37	1962 太田川発電所が完成し、発電所から水を供給されるようになる。
平成元	1989 八木用水の流域で公共下水道が使われ始める。



### 八木用水の流路

— 明治時代以前の流路 ——— 大正時代以降につくられた流路  
河川の流れ等は明治30年前後の地形図によった。

江戸時代の八木用水は、十歩一の取水口から皆川山・城山の東側をまわり、古川と安川の間を通過して、最後は現在の横川駅の南側付近で、現在では埋め立てられてしまった福島川に注いでいました。その後、取水口は十歩一から上流の鳴に移り、終点は長束になりました。また、八木峠のそばに導水トンネル（八木隧道）がつけられたため、皆川山・城山を迂回する水路はなくなりました。

## 学習の手引

### 第32号

# 八木用水



定用水碑（安佐南区八木町）

旧取水口に近い細野神社の前にある石碑で、八木用水がつけられることになったいわれや、卯之助のはたらきが記されています。

## 広島市郷土資料館

〒734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

TEL (082) 253-6771 / FAX (082) 253-6772

URL <http://www.hiroins-net.ne.jp/kyodo/>

## 八木用水ができるまで

八木用水は広島市安佐南区の東部を流れる全長16 kmあまりの農業用水路で、江戸時代中ごろの明和5年(1768)に、太田川・古川と安川※1にはさまれた地域、特に西原村(現在の安佐南区西原)の水不足を解消するためにつくられました。

西原村は、まわりを三本の川に囲まれていましたが、古川と安川は水量が少なく、太田川は農地よりもずいぶん低いところを流れていたため、水田をつくるのに十分な水を引くことができず、長い間水不足に悩まされていました。

広島藩は、西原村の水不足を解消するため、古川や安川に堰を設けて水を引いたり、水車で水をくみあげたり、田畑に水をまくための井戸を掘ったりと、いろいろな試みを行いましたが、どれもうまくいきませんでした。

※1 そのころの安川は、中須で南に向きを変え、現在のせせらぎ公園から新安川のところを流れていました。

## 卯之助のはたらき

南下安村(現在の安佐南区祇園)の大工で、広島藩の土木工事を請け負う仕事をしていた卯之助(1724-83)は、地域の人々が水不足で苦しんでいるのを、何とかして助けることはできないものかと考えました。

卯之助は、西原村の水田に十分な水を引くには、これまで用水を引こうとして失敗に終わっていた地点よりも、ずっと上流の太田川から取水する必要があると考えました。卯之助は八木村(現在の安佐南区八木町)まで休日のたびごとに出かけ、取水口をつくるのに適当な場所を調べました。

卯之助は八木村の十歩一に取水口をつくる計画を立てると、十歩一から西原村までの土地の高低を調べ、確実に水が流れることを確かめました。

卯之助は失敗すれば処罰されるのを覚悟の上で、八木用水の工事を広島藩に願い出ました。許可がおりると、卯之助はさっそく工事にとりかかり、一月足らずの間に八木用水を完成させました。



八木用水の工事のようす【芸備孝義伝拾遺】より 広島市立中央図書館蔵

取水口付近の水路を掘っているところと思われます。鋤鎌や鍬で土砂をさらえて、モッコと天秤棒で運んでいます。

八木用水ができたことで、西原村をはじめとして、八木用水が通る九つの村(八木・緑井・中須・古市※2・西原・長束・新庄・楠木・打越)は長年の水不足から解放され、安定した米づくりを行うことができるようになりました。その当時、八木用水は「定用水」と呼ばれていましたが、地元の人の中には、卯之助の功績をたたえて「卯之助井手」(井手は用水路のこと)と呼ぶ人もありました。

※2 古川をはさんで東が中筋、西が古市で、あわせて中筋古市村が当時の正式名称でした。

## その後の八木用水

卯之助によってつくられて以来、八木用水は、長年にわたって安定して水を送り続けてきましたが、大正8年(1919)の太田川の洪水で取水口付近が壊されたのち、取水口は十歩一から約1.6 km上流の鳴に移されました。一方、下流側では、太田川放水路の工事で、現在の西区内にあたる三篠地区の水路が八木用水から切り離されてしまうことになり、同地区が八木用水の水利組合からぬけたため、今では長束が八木用水の終点になっています。

また、昭和27年(1952)には、皆川山・城山をまわっていたルートにかわって、八木峠のそばを通る導水トンネル(八木隧道)が完成、昭和37年(1962)からは、八木にできた太田川発電所から分水を受けるようになるといった変化もありました。

近年、八木用水の流域では農地が少なくなり、農業用水として果たす役割は小さくなりましたが、八木用水が今もなお郷土のあゆみを語り続ける貴重な歴史的遺産であることには変わりありません。



現在の八木用水(安佐南区八木八丁目)